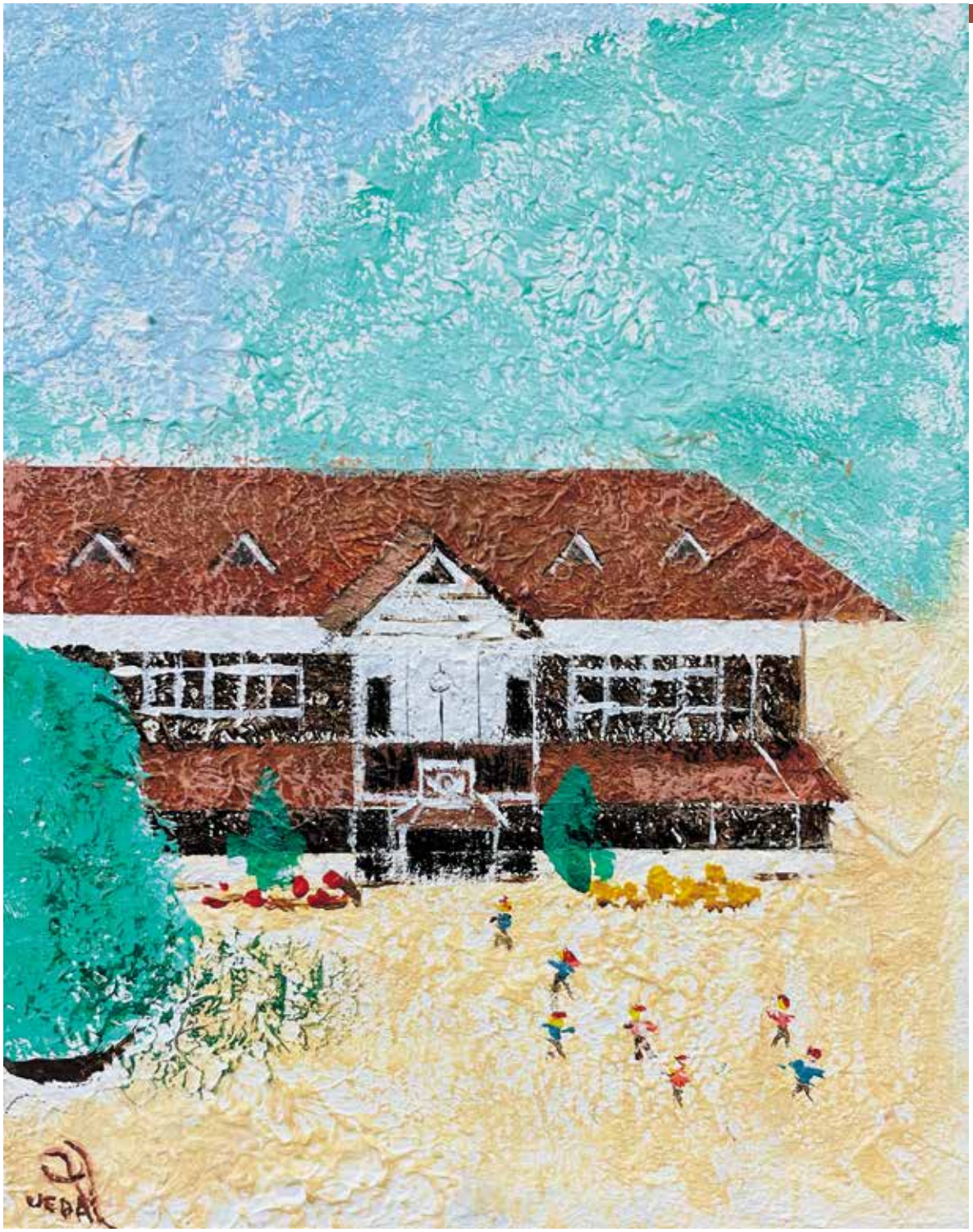
いしづち

2024.3
MARCH
No.157

公益社団法人 愛媛県建築士会
Ehime Society of Architects & Building Engineers
http://www.ehime-shikai.com



畑寺の家
道後温泉の美術品編
世界建築紀行 〝地獄の門〟 とサマルカンド・ブルーを探す旅・後編

ISHIZUCHI
Ehimeken kenchikushikai
2024 3
MARCH No.157

CONTENTS

1	畑寺の家		道上壮／ＶｕＡ……①
2	道後温泉の美術品編：山田衛居		一級建築士　野本　健……③ 文化財・まちづくり委員会　委員　花岡　直樹……③
3	世界建築紀行	“地獄の門”とサマルカンド･ブルーを探す旅（後編）	西予支部　松山　清……⑨
4	寄稿	第３回 ヘリテージ建築を語る（建築市民講座に参加して）	松山支部　中尾　忍……⑬
		宇和島市津島町岩松の重要伝統的建造物群保存地区について	宇和島支部　酒井　純孝……⑭
5	委員会報告	伝統的な酒造形態が感じられる数少ない現役施設「梅美人酒造」（国登録有形文化財）	文化財・まちづくり委員会　委員　眞田井良子……⑮
		建築文化市民講座「第12回 八幡濱港拓 やわたはまリアル謎解きウォーク」	文化財・まちづくり委員会　委員　眞田井良子……⑯
		令和５年度　中国四国ブロックまちづくり委員長会議 in 徳島	文化財・まちづくり委員会　委員長　峰岡　秀和……⑱ 副委員長　曽我部　準……⑱
6	支部報告	令和５年度 一級建築士設計製図試験対策 実例見学会	四国中央支部　髙橋　智洋……㉑
		今年は春から縁起がええわい！	松山支部　北地区　山内　知照……㉒
		無料・住宅耐震相談会	西予支部　支部長　井関　克徳……㉒
7	けんちくの輪	建築と私	松山支部　清水　翔太……㉓
		日々の生活とともに生きる建築	八幡浜支部　小西　健介……㉔
8	お知らせ	地域貢献活動基金助成令和６年度募集要項	事務局……㉕
		第５回理事会議概要報告	事務局……㉖

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。

アクリル、キャンバス

題：「翠小学校」 サイズ／F3

現在の伊予市立翠小学校は、1932年に完成した学校で現在は２代目にあたりる。当時、上灘町長だった井上熊太郎（1880～1938）が建築、近代化遺産として県内としては最古でもある。赤い屋根と中央２階に突き出た校長室や長い廊下が特徴である。旧裁縫室も残っており、今なお畳の教室が残る。校舎は2009年に伊予市指定有形文化財となっている。

（wikipediaより）

表紙作者　上田　勇一　プロフィール

1974　東京生まれ
1980　小学校から高校まで松山在住
1990　東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
1991　愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞
（愛媛県建築士事務所協会主催）
1993　画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
1996　日本工業大学建築学科 卒業
1998　画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
2002　日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」
（新潮社）の装丁担当
2003　美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞（東京／日動画廊）
2010　愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」収蔵される
2015～17　愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「㈱リチェルカ」を設立
2017　「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員／審査員

畑寺の家

道上壯／VuA

HK.House Staircase

僕が独立して初めて手掛けた建築はＨＫ．Ｈｏｕｓｅ「畑寺の家」だ。
当時／2005．06－2007．02／こんなことを考えていた。

超過密の大都市圏でもなく、自然豊かな田園地帯でもない、そんなありふれた地方都市にこの住宅の敷地はある。前面道路は交通量の多い県道で、向かい側には大学の駐車場とテニスコートがある。昼間は県道を通る車とテニスコートの利用者で賑わうものの、夜間には静かで深い闇が敷地の前に広がってゆく。そんな場所だ。

環境と呼応する関係性。この住宅は、周辺環境との関わり方から組み立てられている。昼間は外から光を取り入れつつ、内部は外からは見えない。夜間は外の広がりを取り入れつつ、内部の光が外の闇を照らす。そして、一日を通して通過交通との相互視線を遮ってゆく。西面のソーラーブレードと３面の外壁の理由はここにある。

生活による人の動きは、機能の分割によって可視化されている。部屋の用途ごとに階分けされたことで、機能へのアクセスは各階への垂直移動となり、それは常に外部階段を通ることになる。この行為を繰り返すことで、周辺との関わりを感じたり、周囲に生活の端緒を感じさせたり、環境と呼応する生活の場を考えている。

HK.House Facade

当時の文章から、建築へと至る大きな道筋を振り返ってみよう。

最初に取り組んだことは、敷地と周辺環境を理解することだった。敷地が自宅事務所から近いこともあり、プレゼンテーションに向けて、敷地へは何度も足を運んだ。朝、昼、夕、夜。晴れの日、曇りの日、雨の日。平日、週末、休日。訪れるたびに敷地と周辺環境は表情を変え、様々な建築的ヒントとアイディアを僕に与えてくれた。エスキスを続けながら、何か気になったら敷地に行ってみる。そんな日々をほどなく過ごしていった。

次に取り組んだことは、クライアントがこの場所で、どんな生活を営むのがよいのかを考えることだった。オープンで開放的な生活なのか？クローズドで閉鎖的な生活なのか？はたまたその両方なのか？住宅以外の機能も持ち合わせ、隣近所の人たちも気軽に立ち寄れる住宅なのか？住宅の機能のみに限定して、家族だけで過ごす時間を大切にする住宅なのか？それらの両方を兼ね備えたハイブリッドな住宅なのか？クライアントと何度か対話を重ねながら、建築の方向性を見据えていった。

さらに取り組んだことは、これらの考え方を具現化していったことだ。平面化し、立面化し、立体化し、建築化したことだ。生活上の水平動線をどう解くか？上下移動の垂直動線をどう通すか？三次元の立体としてどう構成するか？住宅として建築としてどう表現す

るか？現実的に目に見える図面として、模型として、３ＤＣＧとして、形づくっていった。

もっと踏み込んで、HK. Houseへの道筋を辿ってみよう。この住宅には、幾つかの想いが織り込まれている。

敷地の前面道路の先には駐車場があり、更にその先には大学のテニスコートがあった。日中は車が頻繁に通り、午後からはテニスコートで部活動が行われていた。昼間は住宅の内部に光を取り込みたいが、車や人からあからさまに内部が見えることは避けたかった。夜間は学校が終わると道路の先には闇が広がった。人気のないその外を内部からの光が照らし、外の広がりを内部空間に取り込みたいと思った。昼間の光の取り込みと視線の遮断、夜間の外部空間の雰囲気づくりと取り込み。この二つから、建築西面のソーラーブレード（縦格子、ルーバー）のアイディアが生まれてきた。

ソーラーブレードは、様々なスタディを重ねて決めていった。正面から見た時の見え掛かりをどうするか？ブレードと隙間の寸法をどれぐらいにするか？ブレードの奥行き寸法をどれぐらいにするか？見付け寸法と見込み寸法のバランスをどれぐらいにするか？素材を何にするか？原寸で平面図を描き、立面図を描き、模型をつくり、さらに３ＤＣＧをつくり、外部からの見え方も内部からの見え方もスタディし、幾つものバリエーションの中から決めていった。

動線は、水平と垂直を同時に検討していった。部屋の機能を階ごとで分けるのか、混成させるのか？平面的な関係性をどうするか？上下をどう繋げるか？内部階段にするか、外部階段にするか？外から階段内部は見えるのか見えないのか？階段から外は見えるのか見えないのか？家族のプライバシーと周辺とのコミュニケーションのバランスを考えながら、住宅とそれ以外の機能を積層・連結させていった。

HK.House 2F Living room

HK.House 3F Bedroom

……書きたいこと伝えたいことは、まだまだ山のようにある。ここまでの話は、膨大なスタディのほんの一片に過ぎない。千里の道の一歩ぐらいだ。テーマ、コンセプト、プログラム、ダイアグラム、エスキス、配置、平面、立面、断面、模型、３ＤＣＧ……。建築を考えるということは、マクロにミクロに様々なスタディを重ね、最も適した結論を見出すということでもあるのだ。

僕が「畑寺の家」に取り組んで気がついたことは、敷地や周辺環境には建築を考える上でのヒントが沢山あり、それらを内外に反復したり呼応したりすることで、その場所ならではの建築をつくることができるということだ。建築を考えることは、苦しくも楽しい。まるでランニングのように。走っている時は苦しいことばかりだが、走り終えた時には、充実感や満足感がある。そして一つの実績が残る。僕のファースト・ランは、小さな住宅だったが、建築というトレイルランニングを進んでゆく上での、大きな手掛かりになった建築でもある。

THE HISTORY OF DOGO ONSEN
ARTWORKS of M.YAMADA

道後温泉の美術品編：山田衛居（やまだもりい）

執筆：　一級建築士　野本　健
監修：文化財・まちづくり委員会　委員　花岡　直樹

▲神の湯本館２階休憩室

＜謝辞＞
下垣　良太様
【川越氷川神社　権禰宜】
～掲載許可及び助言
折井　貴恵様
【川越市立美術館　学芸員】
～山田衛居についての解説及び助言

＜おことわり＞
以下記載内容は、現在の道後温泉本館保存修理工事の状況や収集できた文献から総合的に判断した内容を記載している。そのため、調査状況により新たな知見が得られた場合、記載内容に訂正の必要が生じる可能性はある。

はじまり

道後温泉本館は長年に渡って様々な美術品が展示・収蔵されてきた。神の湯本館２階休憩室の欄間に飾ってあった絵画などは多くの人々にとって馴染み深いものであろう。しかし、長い歴史の中でそういった美術品の来歴の知識や情報は引き継がれず、現在では何もわからないというのが今日の状況である。

私自身、道後温泉の美術品とその来歴は道後温泉本館の歴史的な意味を示す上で大変重要であるものと考え、未来に残す価値があるものと信じている。

道後温泉という歴史的な価値がある場所で何もわからないというのはいささか物悲しく、長きに渡り道後温泉の歴史を調べた結果、少しでも分かったことをまとめ、今後100年先の人たちにこの知識を引き継ぐため筆を執った次第である。

道後温泉と山田衛居の関係性

今回は山田衛居について取り上げたいと考えている。道後温泉本館との関係性は道後温泉本館のシンボル・湯釜である。

湯釜とは道後温泉独自の湯を出す彫刻物である。石でできた円柱の造形物で、頂部に宝珠を模した物が載せてあり、その下に神仏の彫刻物を施した物である。古くから道後温泉で使用されてきたこの湯釜は現在、道後公園の入口付近に湯釜薬師として祀られている。

▲湯釜薬師　～明治27年以前の湯釜

▲放生園　～明治25年の養生湯の湯釜。
現在は足湯として第二の人生を送っている

▲神の湯本館（東側浴室）
～明治27年から使用されている神の湯の湯釜

初代湯之町町長の伊佐庭如矢は明治25年に養生湯（現在の南棟）、明治27年に神の湯本館、明治32年に又新殿・霊の湯棟の建設を行い、現在の道後温泉本館の原型を形作ったのである。

この建築工事の際、大きな問題となったのが湯釜である。当時の神の湯の湯釜は湯釜薬師が使用されており、道後温泉で生きる人々にとっては神仏に近しい存在であった。地元の人々にとって、この湯釜を交換し新たに作り替えることは温泉が止まるなどの祟りが起こるものと信じられていた。

そのため、伊佐庭如矢は新たに作る湯釜を湯釜薬師と同等の神仏に近い湯釜にするため、誰にデザインを依頼すればいいか頭を悩ませたに違いない。

伊佐庭如矢は初代湯之町町長になったのが61歳の時である。彼の経歴は興味深く、松山藩の菅五郎左衛門良弼の家司として仕え、42歳頃に東京神祇官として派遣され、44歳頃に愛媛県職員、58歳頃には金刀比羅神宮の禰宜という経歴を持っている。そのため、公共と神仏どちらに対しても専門性を持つ稀有な人物であった。

伊佐庭如矢が道後温泉の改革を任された明治時代は、明治維新による政教分離がうたわれた時代であり、道後温泉と神仏は深い結びつきがあったことから、道後温泉の建設工事にとって伊佐庭如矢はうってつけの人物であったに違いない。

伊佐庭如矢は道後温泉のために自分が持つ人脈を大いに活用したことが、道後温泉事務所に残る湯之町町長日誌や美術品から垣間見えてくる。

山田衛居は伊佐庭如矢が町長になった明治23年に「橿原宮御即位大礼図」を描き明治天皇に献上している。神社の祠官であり、神仏や天皇を描くことを許された人物が湯釜をデザインするなら、道後温泉の人々も納得するに違いないと考えたのだろう。そのような経緯から道後温泉の湯釜のデザインを依頼したことが推測される。

道後温泉の美術品編

山田（やまだ）　衛居（もりい）

▲山田　衛居
（提供：川越氷川神社）

山田衛居（嘉永2年（1849）～明治40年（1907））は現在の埼玉県さいたま市浦和区下木崎の石田致隆として誕生した。明治2年（1869）に埼玉県の川越氷川神社祠官として迎えられ、婿入りにあたって名を山田衛居と改めた。

衛居は幼少のころから書画を好み、大熊渓雲に和漢学の教えを受け、菊池容斎に歴史学と絵を学んだ。

衛居は「朝日之舎」と名乗り、「朝日之舎日記」を執筆し、当時の川越の日々の様子を残している。「朝日之舎日記」によれば牛若丸や神武天皇など天皇あるいはその忠臣、または彼らにまつわる故事を画題としていることがわかる。衛居の大作として「明治天皇行幸絵巻」と「橿原宮御即位大礼図」が挙げられる。

▲川越氷川神社拝殿（提供：川越氷川神社）

▲川越氷川神社本殿（提供：川越氷川神社）

▲明治天皇行幸絵巻（引用：川越氷川神社祠官　山田衛居）

大国主命と少彦名命

霊の湯２階休憩室を利用されたことがある人は床の間に大国主命が少彦名命を抱えた日本画の掛軸が飾ってあったことを覚えているのではないかと思う。

また、湯之町町長日誌によれば明治32年8月5日の霊の湯開業式にて、「床　湯神之像　大貴巳少彦名ヲ掌中ニ置キ玉フノ図　大教正山田衛居之筆」という記載があり、この掛軸を飾っていたものと考えられ、それだけ貴重な美術品であることがわかってくる。ちなみに霊の湯の一番風呂は町長である伊佐庭如矢である。

▲霊の湯２階休憩室

▲神の湯２階休憩室　～昭和32年頃

▲大国主命

▲少彦名命

道後温泉本館には山田衛居が描いた掛軸が合計４幅保管されている。衛居は展覧会に出品することを嫌い、革新的な絵画様式を追求する主義でもなかったため、現存する絵画作品は非常に少ない。そのため、道後温泉に彼の絵が４幅あることは大変貴重である。

この４幅の掛軸が道後温泉にとってそれぞれ一体どのような関係性を示しているか謎であった。しかし、伊佐庭如矢が手掛けた道後温泉本館の建設の歴史から考えれば自然と読み取れてくる。

湯之町町長日誌によれば、明治24年12月16日に「東京滞在町長ヨリ、養生湯二据付ノ湯釜ヘ彫刻ノ、大貴巳少彦名ノ下絵図到着二月～通達ス」という記載があることから、伊佐庭如矢自身が山田衛居の元へ直接訪れ、下絵を受け取っていたことがわかってくる。また、この２幅の掛軸は養生湯の湯釜と同画題の関係が深い絵であることも考えられる。（養生湯の完成は明治25年１月31日）

しかし、ここで勘のいい読者は気付くかもしれない。現在、放生園で第二の人生を送っている湯釜の彫刻は大国主命ではないかと。実はこの湯釜は背面にも彫刻が施されており、その像は少彦名命なのである。

▲放生園の湯釜

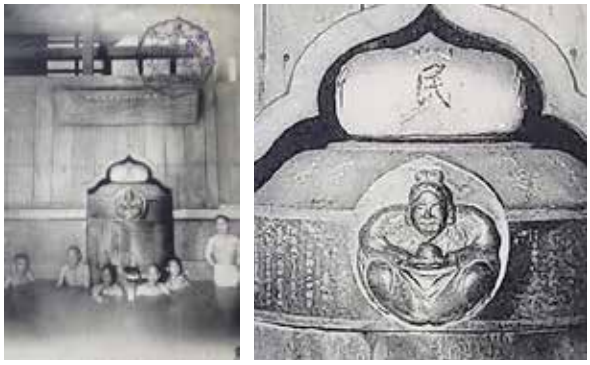
▲刻印部分

▲正面：大国主命

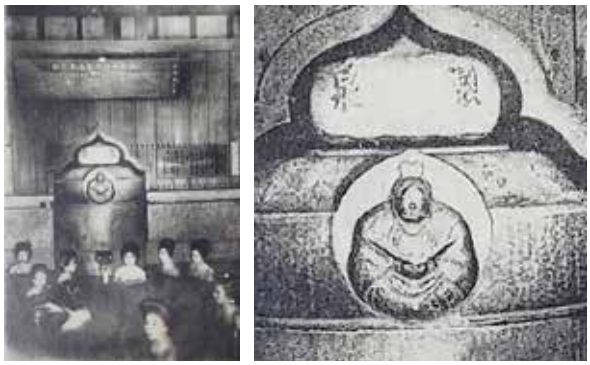
▲背面：少彦名命

この湯釜は養生湯に鎮座していた時、真ん中で仕切られ、男湯と女湯にお湯を配湯していたのである。

道後温泉の美術品編



▲養生湯：男子浴室（提供：二神　將）▲



▲養生湯：女子浴室（提供：二神　將）▲

古写真からも大国主命は男湯側、少彦名命は女湯側に設置されていたこともわかってくる。（玉を抱いているか、抱いていないかで判断できる）

普通は正面しか見ないため、今後、道後温泉を訪れる際は背面側も是非ご覧いただければと思う。

◀神の湯東側浴室▲

次に霊の湯2階休憩室の床の間に飾られていた、大国主命が少彦名命を抱えた日本画の掛軸はどの湯釜と関連付くかは自然と見えてくる。明治27年に製作した神の湯の湯釜である。（現在、神の湯東側浴室で使用されている）

湯之町町長日誌によれば明治27年2月13日「在京町長ヨリ画像及湯釜彫刻文字通知」とあることから、この時期にも山田衛居と直接やりとりしていたものと考えられる。（神の湯の完成は明治27年4月10日）

▲伊佐庭如矢へ贈った絵▲

最後に4幅目の絵である。こちらは左下に「伊予道後温泉湯壺改造予友　伊佐庭君有所望力予作其湯　壺之御神像故絵以贈同君　明治壬辰（甲午に上書）春三月上浣　武蔵川越郷社々司大教正山田衛居」とあり「道後温泉の湯釜の改造にあたり友人伊佐庭君の求めで湯釜の神像を私が描いたので、この絵を同君に贈ります」と読み解くことができる。（明治壬辰は明治25年、明治甲午は明治27年を指す）

道後温泉に保管されていることから、伊佐庭如矢は自身に贈られた絵も道後温泉に寄贈し、活用してもらいたいと考えたものと思われる。

４幅の掛軸は共通して明治壬辰の上から甲午に上書されている。湯之町町長日誌によれば、養生湯は明治25年１月31日に神の湯は明治27年４月10日に営業を開始している。そのため、どちらの年代を鑑みても意味が通じ、また誰が文字を修正したかは不明である。

阿部里雪が執筆した「道後温泉と伊佐庭如矢」によれば、「伊佐庭如矢が金毘羅宮の禰宜であった時に山田衛居と縁を持ち、ひたすら頼み込んで絵を描いてもらった。実際できた湯釜を見た衛居は感動して、石工であった石井源平衛に絵を贈ったが既に亡くなっており、蜂須賀兵蔵が絵を受け取った」という記述が確認される。

伊佐庭如矢に絵を贈った経緯や上記の記述から、３幅の絵は神の湯と養生湯の湯釜の彫刻を手掛けた石工である石井源平衛に贈った絵である可能性も考えられ、その後、道後温泉の改築委員であった蜂須賀兵蔵が道後温泉にこの３幅の絵を保管したものと推測される。

▲御湯殿の湯釜▲

明治34年に伊佐庭如矢が執筆した「道後温泉誌略」によれば、養生湯、神の湯、御湯殿の湯釜は山田衛居がデザインしたと記載されている。しかし、又新殿の湯釜の絵と考えられる下絵や掛軸は道後温泉に保管されておらず、どのような絵であったかは不明である。

■まとめ

湯之町町長日誌や他の文献より、道後温泉の養生湯、神の湯、御湯殿の湯釜を製作する際、伊佐庭如矢が直接、山田衛居の元を訪れ、下絵を受け取り大国主命と少彦名命の御神像を彫刻していたものと考えられる。

「朝日之舎日記」によれば山田衛居は市内や近隣の知人などから頻繁に絵を依頼されていたそうだ。伊佐庭如矢が受け取ったと言われる下絵は道後温泉に保管されていなかったものの、山田衛居が湯釜の出来に感動し、功労者である伊佐庭如矢と石井源平衛に絵を贈ったことは日記の記述から見ても不自然ではないものと思われる。偶然にもその４幅の掛軸が道後温泉に寄贈されたことが、今日の保管状況に至ったことが推察される。

先述したように道後温泉の美術品の来歴や情報が皆無であり、多くが謎に包まれている。しかし、これらの美術品には意味があり、道後温泉の歴史や他の県、人物の歴史を解明する上で非常に重要な意味を持っている。このような重要性を理解してくれる人間が少しでも増えてくれることを願い筆を擱く。

■参考文献

「道後温泉　増補版」
「海南新聞」
「道後温泉と伊佐庭如矢」
「道後温泉誌略」
「道後温泉誌」
「道後温泉　観光編①」
「川越氷川神社祠官　山田衛居」
「二神鷺泉と道後湯之町」
「伊佐庭如矢翁伝」

＊本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁じます。

世界建築紀行 vol.24

“地獄の門”とサマルカンド・ブルーを探す旅・後編

西予支部 松山　清

1 ウズベキスタンの鉄道旅、西から東へ

▲サマルカンドの中心、レギスタン広場

中央アジアのオアシス都市が連なるウズベキスタンは、それを繋ぐように鉄道が走っている。トルクメニスタンの“地獄の門”から西部のヒヴァへと戻り、シルクロードのイスラム建築巡りを開始。その後、ブハラ・サマルカンド・タシケントの順に東へ移動しながら「青の都」の街並みを観察した。首都タシケントは交通の中心だが、一番東部のエリアにある。

各地のイスラム建築の特徴は、“メドレセ”と呼ばれる美しいイスラム教神学校が多数保存されていることだ。イスラム教育を受けるため全寮制で学問を修得するという極めて高度な教育システムが、15世紀頃からこの地域では行われていた。メドレセは２階建ての尖頭アーチが並ぶファサードで、中庭を取り囲んで１階が教室、２階が宿泊室というシンプルな造りの建物だ。１辺100m程度のロの字型の形状のものが多い。

これが各地で保存活用され観光客を魅了するのだが、他にもモザイクタイルで装飾したモスクや廟が世界遺産に登録され、輝きを放っていた。

▲“メドレセ”だったオリエントホテル中庭

▲ヒヴァの城壁

▲ミリタリーオフィスとオリエントホテル

2 シルクロードのイスラム建築群

２.１ タシケントの西約1000kmにあるヒヴァ

ヒヴァで宿泊したオリエントホテルは、ホレズム時代の二重の城壁で囲まれた世界遺産イチャン・カラという、博物館都市の中でも象徴的なメドレセ建築で、尖頭アーチや部屋の規則的な配置、青のモザイクタイル張りの外壁が美しかった。もう他の見学はしなくてもいいと思ったくらいだったが、2023年５月１日朝から現地ガイドを頼み、３人で世界遺産建築の見学をした。同行者Ｔ氏は時刻に合わせて我々のホテルまで来ていた。ホテルの入口には未完成のヒヴァのシンボル、大ミナレット“カルタ・ミノル”があり、その目の前がミリタリーオフィス（政府機関）のクフナ・アルク。この宮殿建築が博物館となっていて、中庭を囲むように政府の施設が配置されていた。入口は恐怖政治をするための“拷問の歴史”を展示した博物館だったり、貨幣鋳造所の歴史と貨幣の造り方を人形で伝える展示室があって、紙幣印刷の版木や鋳造の道具がその歴史を今に伝えていた。屋上に上がるとヒヴァ市内を一望できて、その博物館都市の大きさを実感できた。

市街地を歩くとコーランを置く台やシルク絨毯の製造実演、４人の科学者の顕彰展示館などがあり、ヒヴァの美しい遺跡を見るため世界中から観光客が訪れていた。ガイドはすべて英語で一方的に説明をするので、何と言ったのか３人で確認し合いながら見学した。朝は涼しかったが、日中日向に出ると陽差しが強い。昼のビールがどれ程恋しかったことか。昼食はガイドツアーを終えて午後２時頃に摂った。パスタを頼んだつもりだったが、グリーンパスタというそばのようなもので、少し当て外れ。追加して注文したシシカカブという肉の串刺しが中央アジアらしい味で、ビールの良いあてになり心癒やされた。

レストランで両替を済ませ、この後どうするか3人で相談したところ、この町で一番高いミナレット(尖塔)に上りたいという話になったが、その高さが80m程あるし上りにくい回り階段のため、私はホテルに帰って汗を流すことにした。実はこの街は夜、遺跡全体がライトアップされとても美しいと聞いていたので、それを楽しむため夜も散策したかったのだ。

夕食は行き当たりばったりで、近くのレストランを探す。街が世界遺産のため建物には看板やネオンが全くないので、探すのに苦労した。やっと見つけたレストランのガーデンテーブルは満席だが室内には空席があり、いつも通りの中央アジアのオアシスの味を楽しんだ。その後はヒヴァのライトアップされた旧市街全体に広がるイスラム建築を観て回ったのだが、無理な色彩豊かな演出で街並みの雰囲気が下品になっているかもと心配になった。

▲遺跡のライトアップ

2.2 シルクロード交易の十字路、ブハラ

5月2日朝6時起床、シャワーを浴びて7時から朝食を摂る。午前9時ドライバーがオリエントホテルまで迎えに来て、それでホレズム州の州都ウルゲンチ駅までドライブだ。ドライバーは車が日本製でトヨタのハイエースだと言うことを非常に自慢していた。ヒヴァの旧市街を抜けてウルゲンチへ向かう道は幹線道路でよく整備され、ソ連の名残であろうか、トロリーバスも走っていた。しかし一昨日のトルクメニスタンとは段違いの国の発展ぶりである。外資を入れて国作りをするのと鎖国ではこんなにも差がでるのだろうか。国民のための国作りがどれ程大切なことなのか証明しているようなものだ。

▲ウルゲンチ駅

▲ブハラまでの客車

40分程で州都のウルゲンチ駅に到着。そこでドライバーとはお別れをし、駅前で切符を確認してゲートを抜け駅ビルに入る。もう一回切符を確認されスタンプが押されホームへ出ると、そこにはすでに列車が駐まっていた。6号車の1等車コンパートメントと聞いていたので期待していたが、そこは2段ベッドが2つの狭い部屋だった。すでに3人の大男が横になっていて、さぞかし暑苦しい雰囲気。スーツケースを置く場所も見当たらない。その中の一人が天井上を指さしてそこに上げろ、という。こんな重いもの(20kgくらい)を上げれるわけない、と心で叫びながら力を振り絞って2段ベッドの上まで上げて、さらに天井裏まで担ぎ上げた。みんなちょっとずつ手を貸してくれたが、汗だくになった。

客車には冷房が入っておらず、窓の上の方が少しだけ空いていた。暑い。手ぬぐいで汗を拭いながら扇子をとりだして仰いだ。もうこれではブハラ到着までの6時間、横になっているしかなさそうだ。他の者は本を取り出して読んでいた。走り出すと少し涼しくなったようだ。車窓には点々と生えるホンの僅かな緑と何処までも続くキジルクム砂漠が広がっていた。

▲キジルクム砂漠

▲ブハラ旧市街の通り

午前10時12分ウルゲンチ発で、お昼頃には何か車内販売があるのかと期待していたが何も来ない。もちあわせのチョコレートや瓦せんべいで空腹を満たした。トイレに行った際にお湯が出ることを知る。昼飯抜きよりもさっき苦労して天井まであげた大きなスーツケースを引っ張り下ろしてカップラーメンを取り出して食べた。

4人部屋の2段ベッドの下には日本人が乗っていたので、少し話をする。東京から来てウズベキスタンを回っているらしく、前日はヒヴァでタクシーをチャーターしてヌクス辺りまで観光したそうだ。ドライバーはロシア語しか話せなくて、全く会話ができなかったと言っていた。道路や案内看板も全く英語の記載は無く、現地語とロシア語のみの表記でかなり戸惑ったそうだ。

2.3 ブハラ市内ウォーキングツアー

ブハラのホテルは旧市街地内で、周囲にもそれ程大きなホテルは無く2階建てのペンションのような

建物だった。メインストリートとはいえ細い路地で人通りも疎らで、閑散とした街だった。翌5月3日朝食は午前7時半からで、客室も少ないため少人数で静かにノンビリと食事を摂った。

出発は午前9時。ガイドは日本への留学経験があり、日本語を流暢に話すヒカリさんという現地の女性で、14歳の時から日本語を学んでいたそうだ。ホテルが旧市内のためウォーキングツアーで歩ける範囲に主な遺跡や歴史的な建物があった。ブハラではカレンという地下水路で遠くから水を引いていて、砂漠でありながら泉などで水は豊富に見られた。桑の木が大きく育っているのが印象的だ。地理的に交易が盛んで、オアシス都市らしいバザールが数多く賑わっていた。はさみが有名だというので小さなものを記念に購入したが、少しだけ日本語を話す店主は、コロナ禍があってその後に来た日本人は我々が初めてだと嘆いていた。

市内にはヒヴァ以上のイスラム建築群があり、歩くほどに圧倒された。中でも街を破壊征服のためやって来たチンギスハーンは、カラーン・ミナレットを見上げた時帽子を落とし、それを拾い上げる際に「私に頭を下げさせたこの塔は壊すな」と言ったそう。そのためこの塔は壊されなかったという伝説が伝わっている。

ブハラでは配車アプリが普及していて、ヒカリさんはそれを使って昼食のレストランへ案内してくれた。高天井の広いダイニングは地元の人たちで賑わっており満席だったので、席が空くのを待ってピラフを注文。日本のようなカラリとしたものではなく、たっぷりのごま油で炒められ、ご飯の上に牛肉や馬肉がのせられたものだ。具も多めで完食はできなかったが、これがオアシスの味だと思った。

▲カラーン・ミナレット

2.4 サマルカンドのイスラム建築

その日のうちにブハラから東へ車で移動し、夜遅くサマルカンドのEast Star Hotelに到着。市内の賑やかな場所にあって夜遅くまで音楽が聞こえていた。5月4日の朝食は午前8時からと遅めだったが、午前6時半起床、シャワーを浴びて荷物を整理した。この日は連泊なので部屋に荷物を置いて市内を観光する予定だ。午前9時にホテルを出発。ガイドは日本に4年間留学していたナザロフという男性で、コンビニでバイトをして暮らしていたらしい。優しい男だったがのんびりとした人柄で、レギスタン広場のメドレセでお店を出している。

◀アミール・ティムール廟

遺跡6カ所を巡る予定で、まずドーム屋根がサマルカンドブルーの象徴でもあるアミール・ティムール廟へ行った。ティムール一族が眠る霊廟で、ひときわその青さが引き立っていて、青はティムールが愛した色で、イスラム世界の宝物だとも言われていた。

次にサマルカンドのシンボル、レギスタン広場に向かう。レギスタン大通り沿いの街の真ん中にあり、サマルカンドはこの広場を中心に広がっていた。広場は3つのメドレセに囲まれ、入口から見て左のウルグベク・メドレセ、右のシェルドル・メドレセ、正面のディラカリ・メドレセの順に回った。自分が探していたものはこの微妙な異なる青のモザイクタイルで造り上げられた均整の取れた建物の風景なのだ。途中にタイル工房がありモザイクタイルを記念品に購入、また貸衣装で甲冑をつけて写真を撮りたかったが店主に赤いマントと王冠をかぶせられたところ、現地の子供たちから一緒に撮って欲しいとせがまれたことが思い出に残っている。

その後、ハズラティ・ヒルズ・モスクとショブ・バザール、アフラシャブの丘で天体観測の六分儀遺構や博物館を訪れ、最後に丘の上に立つシャーヒズィンダ廟群を訪れた。無名の廟もあるが全国から大勢の国民が巡礼に来ていた。サマルカンドは日本ではそれ程知られていなくても見所はとても多く、まだまだ未知の魅力を秘めていた。

▲内部に置かれた石

▲レギスタン広場のライトアップ

▲現地の子供たちと

▲シャーヒズィンダ廟群

サマルカンドでの食事はかつてのイスラム世界の都だけあって、他の地域よりも美味しく感じられた。メドレセやモスクを眺めていると、この地域は歴史的に高度な文化を誇っていたが、13世紀前半にチンギスハンに破壊され、さらに19世紀にソビエトに組み込まれて不幸な歴史を辿ったことを知った。1991年ソ連から独立後、遺跡の修復に力を入れてきたことから、自分たちの国の誇りをどれほど取り戻したかったかが伝わってきた。

2.5 首都タシケント

5月5日午前7時半 Esst Star Hotelを出発し再び鉄道でタシケントへ向かった。客車の座席は3等車といえ、コンパートメントで静かな鉄道旅を味わうことが出来た。朝のサマルカンド市内はのんびりトラムが走るシルクロードらしい美しい街並みで、少しヒンヤリして羽織るものが欲しいくらいだったが、昼間は暑くなりそうな予感。駅には30分くらいで到着、駅ビルに入ると正服の男が、「タシケントへ行くのか?」と声を掛けてきた。そうだと答えるとスーツケースをキャリーに載せてここで待て、という。ホームまで段差があるためそこまで運ぶらしい。そんなシステムかと思ったら、後で3万スム(約300円)くれと請求された。1万スムに値切ったが応じてくれず、支払う結果となった。声を掛けてくる親切を装った現地人は要注意、相手にしてはいけない。親切程高いものはないと思い知った。

列車は午前8時49分にサマルカンド駅を出てしばらく走ると一面の砂漠地帯となり、タシケントが近づくに連れて背の低い草が一面に広がる草原へと変わっていく。トルクメニスタンの砂漠よりは何かの動物が生きて行けそうな緑が多く感じられ、牛を放牧している様子も見られた。どこまでも地平線が続き山はない。時々平屋建ての建物が見えたりした。列車は昼過ぎにタシケントに着いたが、車内ではお茶のサービスがあったくらい。

タシケント駅では20歳のガイド・アサドさんが待っていた。タシケントの東洋学大学の学生で、日本留学が決まっているらしい。博学の好青年で、最後まで一生懸命案内をしてくれた。まず始めにトラディショナルなレストランでの昼食に案内された。と言っても食べたのは結局シシカカブだったが、さすが首都だけあってこれまで食べた中で一番旨い。上等な肉を使っていたのだろう。その後タシケントの金曜モスクと言われるハズラティ・イマーム・モスクへ向かった。そこにはティムールが遠征から持ち帰ったという世界最古のコーランが展示されていた。羊の皮にアラビア語で書かれた幅1mはあろうかという程の大きな本のようなものだ。隣には中央アジアで最大のモスクを建設中で、広場など外構工事も最終段階を迎え今年には完成するらしい。その他青いドームのチョルスー・バザール、ナヴォイ劇場、日本人墓地を順に巡った。

▲ハズラティ・イマーム・モスク

▲チョルスー・バザール

▲ナヴォイ劇場

▲ゴージャスな地下鉄駅

▲日本人墓地

ナヴォイ劇場はシベリア抑留されていた日本人捕虜が勤勉に働いて素晴らしい劇場を造ったと評価されていて、その記念碑が外壁に埋め込まれている。シベリア抑留79人の日本人墓地は四角い平板が並べられた簡素な広場で、嗜好を凝らしたイスラムの墓とは全く異質だが、この地で果てた日本人のことを思い出させる物だった。

3 中央アジア・オアシスの旅を終えて

サマルカンドブルーとはラピスラズリの青のことではないかと思っていたが、実はモザイクタイルに塗られる釉薬で現れる微妙な違いの青が作り出すものだった。この青をティムールが愛し、癒やしの色として大切に伝統工芸のように伝承してきたのだ。それがイスラム建築と融合してアラベスク模様を引き立たせ“青の都”と呼ばれるようになったのだ。

第３回 ヘリテージ建築を語る（建築市民講座に参加して）

松山支部 中尾 忍

日 時：2023年11月４日（土）開催
場 所：坂の上の雲ミュージアム２Ｆイベントホール
参加者：23名

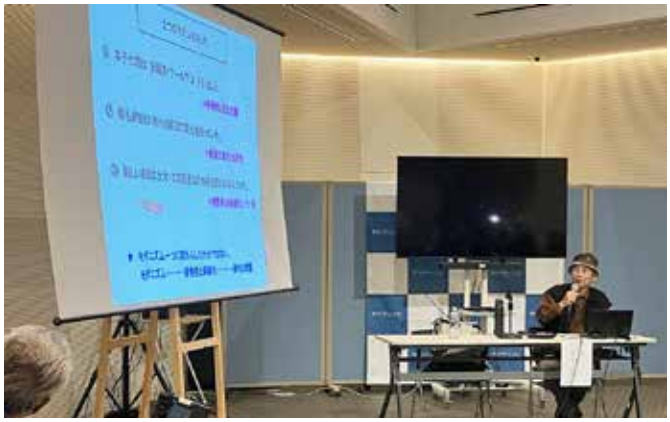
第３回目ヘリテージ建築を語る（建築市民講座）が坂の上の雲ミュージアムで１１月４日（土）に開催されました。今回は講師に地域の近代化遺産調査等にも携わられ、県内の建築土木遺産に詳しい岡崎直司氏をお招きし、大正～昭和の前半の時期に当時最先端だったコンクリート技術を採用した土木遺産（橋等）についてお話し頂きました。

▲岡崎氏の話を聞く参加者

近代の建築が関東大震災以降、コンクリート技術が採用され始めたころに、県内の土木事業にも社会資本整備が進展しました。幅広い視点で当時の県の土木技師（坂本一平氏）の活躍等についても少しご紹介頂きながら、土木遺産も含めた当時のコンクリート技術が使われた遺産を知ることで、広い視点で県庁等の現在保存されている建築物の価値について知って頂く企画としました。

▲岡崎直司氏　土木遺産の説明の様子

その後、建築家の笹木篤氏による２つのモダニズムという、当時の様式の動きについての解説の後、パネルディ



▲進行の笹木篤氏

スカッションという形で会場の参加者で土木遺産、建築と土木について、登録はされていないが地域の文化財としての価値ある土木、建築遺産について、参加者の皆様と意見交換が行われました。

戦前のものづくりの時代背景なども含め、土木遺産の歴史や物語に詳しい岡崎氏の解説により、戦前と戦後の橋の文化、関わった人々の物語についても説明して頂きました。あまりよく知られていませんが、当時、愛媛県は橋などの土木遺産が多くあったようで、岡崎氏より、土木遺産のジャンルと県内の分布状況、（交通土木・船舶土木・戦時関連土木等）について説明がありました。

また、明治期のお雇い外国人（県内ではブラントンによる灯台の建設）による日本への近代化の技術の輸入、鉄道（レール・給水塔、セメント等）の県内の歴史や、戦前の軍事遺産、まだあまり知られてはいませんが、物語のある土木遺産や建築について、建築市民講座、その他の機会などの場を通じて、地域の人に知って頂く機会を作ること、知名度を上げることが大切と説明がありました。

建築家で日土小学校を設計した故松村正恒氏を八幡浜市役所に雇用した菊池氏の自宅（菊池邸）の保存活動についてのお話も伺え、地域の歴史の一部となっている建物の保存活動の大切さも教えて頂きました。来年度は坂の上の雲ミュージアムの増築工事の関係で、「ヘリテージ建築を語る」はしばらくお休みさせて頂きます。来年度以降、また企画できたらと思っています。

共催頂きました、松山市、（一社）日本建築学会四国支部愛媛支所、（一社）愛媛県建築士事務所協会、（一社）愛媛県建設業協会建築部会、（公社）愛媛県建築士会の皆様、後援頂きました、瀬戸内アーキテクチャ様、ご協力ありがとうございました。

宇和島市津島町岩松の重要伝統的建造物群保存地区について

宇和島支部　酒井　純孝

愛媛県で３番目に「重要伝統的建造物群保存地区」指定された、宇和島市津島町岩松地区の概要を記載してみる。

【津島町岩松の位置的環境】

豊後水道に宇和海があり、リアス海岸の地形で文化、産業で日本各地に貢献してきた土地であると思う。豊後水道は太平洋から入る。九州から四国の巾は30～50kmの距離を有し、入口から流れてくる潮により、江戸末期・明治・大正時代と日本でも有数のイワシの漁場であった。そのイワシを追って鰤や鮪が宇和海にまで入ってきた。

この漁場環境から現在の愛南町西海町外泊の石垣の里は、建物の軒まで石垣を積み、風雨から建物を守り、漁業に貢献した集落が残っている実に美しい風景。この地から由良半島に向かうこと車で40分、内海町魚神山本網代に鰤や鮪の加工を行った浦和盛三郎家が残る。港から御影石のスロープを造り、工場まで魚類を引込（むろ）に入れて保存。むろの氷は宇和島の鬼ヶ城から搬入したとのこと。全ての施設が残る。詳細は犬伏武彦先生が書かれた「南海僻隅の痴蛙なれど」にある。建物は梁間10.0m・桁行き43.0m・木造２階（延面積200坪）石場建て。

この地から車で40分かけて津島町岩松に移動。岩松より豊後水道から瀬戸内海を通り、大阪方面に千石船で物資を運び繁栄した岩松川河口の近くに痕跡とまちなみが残る。

【津島町岩松のまちなみ】

前記の産業の変化と地形から養蚕が盛んになり、岩松に製糸工場が明治42年（1909）工場が創設された。繭は岩松に集まるようになり、松尾峠を越えて宇和島の工場にも出荷されるようになった。南予で製糸業が最大になって、この景気は昭和初期まで続いた。養蚕を主として岩松のまちなみには酒屋３・醤油７・酢３・製糸３・製蝋６件と、沢山の産業が存続していた。製蝋と生糸の販売先は、神戸・横浜をテリトリーとしていた。あとの産業製品は地元を主としていた。岩松の中央、山手にある土居の奥には小西家の長屋があり、そこから岩松川に向かうと本町通り（商店街）となる。その通り下側に中通り（芳原溝）の道ができ、岩松川沿いの川通りに建物ができる。

現在の新大橋川下に、土居の奥への山手に通じる利便性を高める縦の道がある。時にはこの道を通り酒屋・醤油・酢・製糸・製蝋の産業製品を湊町から出荷する店も多かった。大正時代には帆前船で商品を積み出していたが、長い年月をかけて川底に砂が堆積して川の水深が浅くなり、明治45年代に川下の近家・玉ヶ月へ港が移動した。時代が前後するが貞享元年（1684）以降も勢力をふるった。

小西家は本家・分家の両家で酒造・醤油造・製蝋などを生業としていたが、最大の集散物は櫨であった。時代が進んでも相変わらず木炭や抗木が出荷されていた。木炭は大阪、抗木は北九州の炭田地帯に出荷していた。

養蚕は時代が進み、より一層北灘や下灘や愛南町でも盛んになり、集散地として繁栄したまちなみとなった。

【津島町岩松小西家の存在】

第二次大戦前、岩松に君臨し繁栄をほしいままにていたのは小西家であった。貞享元年（1684）、宇和島から岩松に移住してきたのが小西酒造で、宇和島藩主伊達村候より苗字帯刀を許され、小西と名乗る最も高い庄屋であった。

小西家は本家小西と分家東小西があり、岩松の中心に居宅を構えた。本家小西家は大地主で、分家東小西家とも酒造と製蝋を生業としていたが、明治中期には両家とも生業を廃業。借家と大地主として水田・山林に切り替て大変繁栄した。しかし第二次世界大戦後と共に没落した。その後時代が進み、大正時代となり、道路整備が整い宇和島から城辺町までバス会社の整備が進んで、乗り合いバスが通るようになった。（現在も交通遺産施設が存在）

このような産業と、小西家の変遷により残り少なくなったまちなみの建造物や工作物などの姿が確認できる。江戸末期・明治・大正・昭和戦前の建物が400件以上残る。まちなみの住民の高齢化、色々な店の衰退など諸条件の変化があるが、行政と協議の上、先ず調査組織を設立し各時代の建物の調査に入る。

公益法人愛媛県建築士会　元　会　長　赤根忠良
元事務局長　大西勝秀

（調査担当）
宇和島支部ヘリテージマネージャー受講者9名で組織化

（調査年月日）
第１回　令和元年12月から令和２年３月末（46棟）
第２回　令和２年５月から令和３年２月末（111棟）
合計157棟

（業務内容）
敷地面積・平面図・立面図（２面以上）
建築基準法・都市計画法・消防法等宇和島市が認定する「重要伝統的建造物群保存地区」の基本台帳の作成

◎参加建築士（ヘリテージマネージャー）
○石川淳　○酒井久和　○與那原浩　藤井英樹
井上静夫　兵頭友義　森川晴喜
○印は委員長（各法律・業務内容・製本の担当）

◎行政ヘリテージマネージャー協力者　大塚　志織

◎宇和島市役所 スポーツ文化財課担当
森田浩二　西澤昌平　安藤裕之　西本　友美

全ての書類原案・調査指導・全ての指導監修　酒井　純孝

国の文化審議会　佐藤信会長が文化庁に答申
内訳は愛媛新聞（令和５年11月24日付）に「重要伝統的建造物群保存地区」とほか１基２棟の詳細もあり。

赤根忠良元会長、大西勝秀元事務局長の御両名には詳細にわたるご指導を賜りまして有り難うございました。また、参加くださいました行政の皆様、実務を担当くださいました皆様、ありがとうございました。このニュースの記事により、「重要伝統的建造物群保存地区」の内示の連絡があり安堵しました。宇和島支部ヘリテージマネージャーの方々が長い年月をかけて重要な建造物の修理・復原に努めて頂くように願いを込めて報告と御礼と致します。

参考文献

「南海僻隅の痴蛙なれど」　犬伏武彦著
愛媛県歴史博物館ホームページ
「愛媛県の近代化遺産」

伝統的な酒造形態が感じられる数少ない現役施設「梅美人酒造」（国登録有形文化財）

文化財・まちづくり委員会　委員　眞田井　良子

平成16年3月2日登録／3月29日告示

【概要】

愛媛醸造業の近代設備が残る建物群で、住居と生産施設が同一施設にある昔ながらの形態を残しています。

梅美人酒造は、上田梅一によって1916（大正5）年に創業されました。その後、施設・設備を順次整備し、現在まで約100年に渡って醸造業を続けています。国登録の有形文化財としての建造物は、「梅美人酒造事務所」「梅美人酒造住宅主屋」「梅美人酒造釜場及び煙突」「梅美人酒造醸造場」の4件です。そのうち、主屋、釜場、醸造場は創業当時からのものです。

【梅美人酒造事務所】

街道に東面している事務所は、昭和6（1931）年に建てられた木造二階建て土葺瓦屋根の和風建築です。正面側をタイル貼りとして洋風に見せ、腰は花崗岩のルスティカ積み、柱型の間に上げ下げ窓を配し、パラペットを背面側端部に廻しています。正面から見える三方向に看板のように外壁を立てており、「看板建築」と呼ばれ、造り酒屋の店舗事務所の洋風化を示す事例として大変貴重です。

▲事務所の正面

【梅美人酒造釜場及び煙突】

事務所の西方に位置し、木造平家建て、切妻屋根、桟瓦葺で、小屋組はキングポストトラスとし、換気用の越屋根を上げています。西妻面の南寄りには、昭和3（1928）年の昭和天皇大典を記念して建てられた正方形断面のレンガ造煙突があります。表面には白タイルで「ウメビジンホン店」の文字が記されています。かつては、港からもこの文字が見え、地域のランドマーク的な役割を果たしていました。

▲レンガ造の煙突

【生産設備の産業遺産】

貯蔵庫に取り付けられたクーラー（昭和13年製）、発行したもろみを酒と酒粕に分離する機械である圧搾機（昭和9年製）など数多くみられます。

【酒造りのこだわり】

麹用の米は湿度調整の最適な2階の麹室（室（むろ）と呼ばれる部屋）にあり、自然断熱材として厚さ40cmの周囲壁の中に籾殻（もみがら）がぎっしり詰まっています。仕込み蔵は大吟醸等の特定名称酒を造る専用の冷蔵蔵を設けています。その冷蔵蔵では4本のサーマルタンクで、吟醸酒に向いている低温発酵の調整を行います。

▲白浜小学校6年生 総合的な学習の時間に見学

【酒造りを支える水】

地下30メートルに流れる水脈から引き出される井戸水は、霊峰金山出石山の麓の雨が地中深く染み込み、酒造りに最適な成分であるミネラルなどをゆっくりと溶け込ませています。梅美人が創業以来この地を一歩も動かず酒を造り続けているのは、このかけがえのない恵みがあるからです。ぜひ、訪れた際には事務所で試飲ができますので、悠久の恵みをご堪能ください。

建築文化市民講座
「第12回 八幡濱港拓（やわたはまみなとびらき）
やわたはまリアル謎解きウォーク」

文化財・まちづくり委員会　委員　眞田井　良子

日時：2023年11月23日(木･祝)10:00～12:00
会場：八幡浜市民文化活動センターComican、
八幡浜市の文化ゾーン

【背景と目的】

今年度の建築文化市民講座は、小学生ご家族に多数ご参加頂きたかったため、八幡濱港拓実行委員会の皆様が、2015年から継続開催されている町並みウォークと共催させていただきました。

「八幡濱港拓」は、港を中心に栄えた八幡浜市のいろいろなところを同時に拓(ひら)いて、貴重なものを見たり、体験をしていただくことにより、八幡浜の魅力を知っていただき、交流人口の増加を図るとともに、ガイドの育成を通じて、地域への誇りと愛着を育むことを目的としています。

【事前勉強会：松蔭小学校４年生 14名、先生２名】

日時：2023年10月20日(金) 10:15～11:30
講師：岡崎直司、眞田井良子

▲地細工紺屋　若松

総合的な学習の時間に、まち探検として、地細工紺屋若松、菊池清治邸、坂本歯科医院を学習しました。雨の中でしたが、探検バックを活用して熱心にメモを取ったり質問が飛び交いました。参加した児童の感想の一部をご紹介致します。

■地細工紺屋　若松

- 旗は机の上で染めていると思っていたけど、畳の上で染めていると聞いてびっくりしました。
- 一回色を塗って終わりではなく、何度も色を重ねて色を濃い色にしていくのがすごいと思いました。
- 江戸時代から200年もやっていてびっくりしました。

■菊池清治邸

- あんなにまっすぐな桜框があって、よっぽどお金があったのだなと思いました。
- 昔は２階から海が見えていたと思います。想像するとオシャレな店を作ったと思います。
- 菊池清治という名前を何人も継いでいるということを知りました。
- お客さんがたくさんきた時のために店土間を広くしているのがびっくりしました。
- 階段が急で登るのが大変で昔の人はすごいなと思いました。とても大きくて広い迷路のような家でした。

■坂本歯科医院

- 100年前の蓄音機の音を聞かせていただきました。すごくきれいな音でした。昔の人たちもあの音を聞いていたんだなと思いました。
- びっくりしたのは、松蔭小学校70周年記念像を作ったのが坂本歯科の先生の弟の坂本榮太郎さんだったことです。
- 今度の日曜日に母と蓄音機の音を聴きに行ってみようと思います。

▲図書館の前で集合写真撮影

【事前勉強会：江戸岡小学校６年生１名】

日時：2023年11月12日(日) 10:00～12:00
講師：岡崎直司、眞田井良子

江戸岡小学校は今年度、総合的な学習の時間でまち探検を開催するのが難しく、ボランティアガイドを希望してくれた児童を対象に、休日に学習会を開催致しました。実際にガイドを行う八幡神社を中心に、坂本歯科医院、菊池清治邸などを見学して頂きました。

坂本歯科医院では、実際に蓄音機を操作して頂くと、かけたレコードの曲を聴いたことがあったり、ビクター犬が悲しそうな表情をしている意味を知っていたり、将来町並みガイドになっていただけそうな人材でした。

▲100年前に作られた蓄音機のゼンマイを巻いているところ

【事前勉強会：建築士会文化財まちづくり委員会】

日時：2023年11月12日(日) 13:30～15:30
講師：岡崎直司、眞田井良子
参加：５名（文化財・まちづくり委員）
ガイドをしていただきたい場所を順番に巡って学習後、

どの場所をガイドするか担当を決め、当日までの準備事項や、当日の役割分担などを確認しました。

▲坂本歯科医院内での学習風景

【やわたはまリアル謎解きウォーク】

日時：2023年11月23日(木･祝)10:00～12:00
会場：八幡浜市民文化活動センターComican、
八幡浜市の文化ゾーン
子どもガイド：松蔭小学校４年生４名(担当:地細工紺屋若松、菊池清治邸)江戸岡小学校６年生１名(担当：八幡神社)
建築士会文化財まちづくり委員ガイド：
花岡直樹(担当：菊池清治邸)、峰岡秀和・眞田井良子(担当：坂本歯科医院) 大西千里(担当：大法寺) 渡辺建文(担当：八幡神社) 菅野隆次(担当：旧図書館)
各班引率ガイド：
菊池宏坪、久保幸利、岡崎直司(八幡濱みてみん會)
各班タイムキーパー：
原政治、東野淳、安藤嘉晃(建築士会八幡浜支部)
一般参加人数：52名
集合：八幡浜市民活動センターComican
挨拶：岡崎直司(八幡濱みてみん會 顧問)
花岡直樹(建築士会)
出発宣言：菊池宏坪(八幡濱みてみん會)

当日は天気に恵まれ、小学生の親子連れを中心に52名の参加者が集まりました。３班に分けて、１０分おきにComicanを出発し、①地細工紺屋 若松　②菊池清治邸　③坂本歯科医院　④大法寺　⑤八幡神社　⑥旧図書館でガイド・クイズに答えていただきました。

Comicanに戻ってきたら、答え合わせをして頂き、参加賞（水、日の丸みかん、パンメゾンの塩パン、八幡浜みなと湯の割引券）をプレゼント。お昼ご飯に最適な八幡浜ちゃんぽんのお店を紹介した「ちゃんぽんマップ」を配布して心地良い疲労を感じながら、事故や怪我もなく無事終了致しました。後日、小学生には八幡浜みなっとみなと交流館より、「八幡濱観光大使」証と副賞を授与致しました。参加してくれた皆さんが地域への誇りと愛着を感じてくれたのではないかと思います。一般市民に建築やまちのことを広く知って頂く機会として、今後も継続して取り組んでいきたいと思います。

今回、ご参加・ご協力・ご協賛頂きました皆様に、心より感謝申し上げます。

※ガイドをしてくれた方と、一般参加者へのアンケートより、感想を一部紹介いたします。

■ガイド役の感想

・旧図書館。モダニズムの先駆となった建物が愛媛県にある事が良かった。建物の名称、機能が変わってもエッセンスは残し、動態保存をぜひ実行して欲しい。後進に文化を伝える意味においても町並保存に関する市民を取り込んだ企画。
・子ども達がたいくつせず興味をもって話を聞いてくれたのが大変良かった。クイズなどがよかったのかと思う。
・皆で手分けして解説を（勉強が必要なので）したのがよい。特に小学生。
・神話や神様について知れて楽しかった。
・木やいろいろなことを知れてよかった。

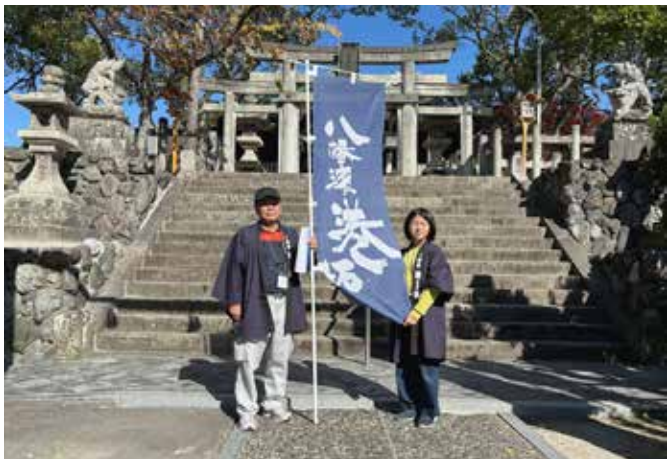
■一般参加者の感想

・ガイドさんが調べた時の感想も伝えてくれてとても良かったです。
・地元の子どもにとってもよい学びとなりますね。
・わかりやすく説明していただきありがとうございました。
・また聞きたい。

■参加者の属性

(年齢)
10代未満19名、10代8名、20代 1名、30代7名、40代7名、50代3名、60代3名、70代4名
(住所)
市内40名、市外12名
（伊予市1、松山市6、伊方町2、西予市3）

▲菊池清治邸と地細工紺屋若松のガイド担当



▲八幡神社のガイド担当

令和５年度 中国四国ブロック まちづくり委員長会議 in 徳島

文化財・まちづくり委員会　委員長　峰岡　秀和　　副委員長　曽我部　準

はじめに

令和6年1月20・21日、徳島県海部郡牟岐町出羽島にて中国四国ブロックまちづくり委員長会議が行われ、文化財まちづくり委員の3名（峰岡・曽我部・花岡）が出席した。

出羽島の特徴

▲出羽島全景（googleより）

徳島県の南、高知県との境に近い牟岐町は、松山からおよそ4時間のドライブである。その牟岐港を出て、南に15分ほど船に乗ったところに出羽島はある。面積は65ha、1周約4kmの小さな島だ。寛政12年（1800）に本格的な移住が始まった。藩からの政策もあり、明治初年には80戸、電気・水道が整備され、昭和49年には島の人口は799人となった。出羽島は太平洋に背を向けるように砂嘴が入り江を形成しており、これが天然の漁港となっている。黒潮の影響を受け、温暖な気候で、徳島県では唯一亜熱帯気候に属する。

産業は漁業で、カツオ漁が盛んだったようで、以前は鰹節工場が数軒あったそうである。ほぼ島全体の住戸が漁村として重伝建の指定を受けている。車のない島として知られており、自転車や荷物を運ぶ「ねこぐるま」が多くみられた。

今回の会議はその出羽島で行われた。少し天気の悪い中、伝建指定に先立って修繕された「波止の家」に集まり、各県の委員会報告がなされた。

▲出羽島の港の様子

▲古い町並み。家と海をつなぐ小道も特徴的

▲会場となった「波止の家」

１日目

牟岐町教育委員会から「重伝建地区・出羽島について」の講演があり、出羽島の成り立ち、伝建指定の道のり、保存修理の許可基準と、それに基づく修理状況の説明があった。次に徳島県建築士会喜多順三さん（空間計画研究所主宰）より伝建指定の際の状況、「波止の家」の修理報告

が行われた。蟻害や腐朽などがあり、修繕の苦労の話や痕跡に基づく復旧の話を伺った。

各県報告

＜徳島県＞

避難所は地震発生時、真っ先に逃げ込むところであるが、管理者がいなければ中に入ることができない。徳島では震度5以上の地震があれば避難所のカギが開くようになっている。しかし、避難所も被災しており、本来ならば応急危険度判定がなされるべき建物である。鍵が開くのも善し悪しで、課題が残る。また、危険度判定は建物の周囲から観察したほうが良い。建物に入る前に安全確認が必要。

＜香川県＞

香川県では今年度からまちづくり委員会ができ、委員会としてしっかり活動できるようになった。空き家への提言や文化財を中心とした防災・調査・まちづくりを行っている。五名・三本松・津田・仁尾の4か所でフィールドワークを行った。各地域の特色に合わせてまちづくり活動を行っている。地域の材（人材・材料）を生かした建築など。

＜高知県＞

逃げ地図ワークショップがコロナで止まっていたので普及していきたい。海のギャラリーの取り組みの説明。雨漏りの補修から登録有形への動き。活用の方法を探る。

赤レンガ商家はクラウドファンディングにより屋根の修理が完了した。登録有形の申請中である。ヘリテージマネージャーのスキルアップ講座や子ども食堂など地域に密着した活用・活動を行っている。

＜島根県＞

仮設住宅について、配置計画や実際にそこで生活が可能なのか、給排水・電気などのライフラインの調査なども必要。マニュアル化する。風水被害の応急復旧マニュアルの作成。逆引きできるようにし、使いやすくしている。歴史的建造物調査もしており、図面作成・写真保存など。バリアフリーアドバイザーによる観光バリアフリー（愛知県）との情報交換。

＜山口県＞

地震があまりないため、地震後の対策ではなく地震前の対策が必要。HMの活動が盛ん。ステップアップ講座での図面作成・実測調査を行っている。

＜鳥取県＞

浸水被害住宅復旧のための一般向け講習会を行う。事前申し込みだけで76名集まる。水害について、水害の備え、水害後の被災者支援などの内容。実際に水の重さを想定し扉に重しをし、開けてもらう実演などをした。子供にカメラを渡し、子供目線でまちを撮るまち歩きを実施。

＜岡山県＞

湯郷まち歩きワークショップを実施。市民に景観に興味を持ってもらい、景観の重要性を啓発した。マンション防災について災害リスク研修やマンション探検ツアーを実施。おかやま空き家を生まないプロジェクトがスタート。行政・大学・コンサル・弁護士会・司法書士会・宅建協会と協力。福祉まちづくりは一般の方々へ福祉的な講座をオンラインで行う準備。木のまちづくり班を設置。現在40名が参加し活動している。

＜広島県＞

避難所で使用する紙でできた間仕切り「ペーパーパーテーションシステム」の紹介。軽くて持ち運びが便利だが、薄すぎないかの不安もある。呉YWCA建物紹介。旧日本軍の木造施設で、地域として活用を行っていきたいが、どのような活用方法があるか。よくなるということは理解してもらえるが、その先へ進む方向が現在わからない状況とのこと。

▲会議の様子

2日目（曽我部）

小雨が降ったりやんだりという中でのまちあるきとなっ

た。参加者を３班に分けた中で愛媛は第２班。ボランティアガイドを担当してくれたのは昭和21年出羽島生まれの原田さん、まさに島の古老である。漁村としての重伝建指定は国内で２ヶ所しかなく、ここ出羽島と舟屋で有名な伊根だけとのこと。民家は通りに面した間口４間の田の字平面の木造平屋、切妻屋根で平入であり１間巾の玄関と２間巾の出格子の付いた窓、その間に１間巾の掃き出し硝子障子があり外部には跳ね上げ式の蔀戸とばったり床几が備わっているのが代表的な様式である。建物に関してはあなたたちの方が詳しいだろうからと、主に島の歴史や漁業に沸いたころの話などをしてくれた。また参加者からでた質問も島のインフラに関することが多く、真水の確保や排水処理、電気、電話についての歴史についてお聞き出来た。現在はいずれも対岸の牟岐町本土から延びる海底ケーブルや送水管が備わっているが、排水だけは海に流すことが出来ないため簡易水洗にとどまっているとのことだった。

▲まちあるきの様子

▲植樹を行った丘の展望台

１時間ほどのまちあるきの後は港を見下ろす展望台のある丘まで上がって植樹体験を行った。「海に浮かぶ食べられる森」をコンセプトに果実の実る木々の森を未来に向け形成・継承していこうというもので、講師は2017年に移住してきた原田友彦さん。パプアニューギニアで青年海外協力隊員として活動した経験からこのコンセプトを思いつき「人と自然が仲良く暮らす地球」を目指して活動しているとのこと。今回植樹したのはサトウカエデの苗木で、大きくなるとメープルシロップの原料が取れる木である。原田さんにアドバイスを受けながら参加者が見守る中、有志数名で植樹し広島県から来た家頭（やがしら）さんのアイデアで「建築シロップの木」と名付けられた。自分が収穫するためではなく他の誰かの為に果樹の森を作っていく、長い時間の中での利他的行動というのを建築にあてはめるとどうなるのだろうと思いを馳せる体験であった。答えはまだこれからである。

さいごに

各県様々な活動を行っており、有意義な情報交換が得られました。今回感じたのは各県防災に関するワークショップや勉強会が多くなっていることです。地震のような大規模災害だけでなく、風水害に対する意識が非常に高くなってきていました。水害に対する復旧マニュアルの周知など、愛媛県でも必要に感じるところが多くありました。

企画・準備・片付けと徳島県建築士会の皆様には大変お世話になりました。有意義な会議ができたことをお礼申し上げます。来年度は広島で行われます。ぜひ多くの方に出席していただきたく思います。

▲参加者での集合写真

令和５年度 一級建築士設計製図 試験対策 実例見学会

四国中央支部 髙橋 智洋

開 催 日：令和5年9月9日(土) 17:00～19:00
開催場所：川之江図書館（四国中央市）
参 加 者：見学17名
スタッフ：四国中央支部5名
共　　催：四国中央市
　　建築住宅課、文化・スポーツ振興課

四国中央市の建築住宅課より資料を提供して頂き、令和5年度一級建築士設計製図試験課題の「図書館」の実例見学会を開催しました。

支部初の試みのため参加人数に不安を感じましたが、立地条件にも助けられ県内外から17名に参加して頂くことができました。見学時間は図書館利用者の迷惑にならないように、また自由に見て頂くため閉館後の実施としました。

▲資料による解説

まず建設当時の資料を基に、建築計画・構造計画・設備計画の説明を行い、その後館内を見学。普段見ることのできないバックヤードや、集密書架、屋上の機械設備について、実際の使用方法やサイズ感、配管ルールなどを確認しました。本試験でも「集密書架・ハト小屋」について記述を求められましたので、参加された方はイメージしやすかったのではないでしょうか。また今回は図書館建設の経緯を記した当時の資料が残っており、より試験対策に寄せた見学会が開催できたと考えます。

建築士試験について令和2年に受験要件が緩和された事で実務経験が無くても受験できるようになりましたが、受験者のレベルは毎年上がっており、より詳細な知識が要求されているように感じます。また受験者を職域別に見ると建築士事務所の割合は27.0%、職務別では建築設計が32.9%となっており、直接設計に携わっていない受験者も多いことが窺えます。

見学会を通じて建築士試験合格の一助とする事はもとより、士会の活動を建築業界に幅広く知ってもらう事で知名度向上や地位向上などにつながればと考えています。

最後に、見学会にご尽力頂いた川之江図書館の皆様、四国中央市建築住宅課、文化・スポーツ振興課の皆様改めてお礼申し上げます。

▲屋上設備スペースを見学

▲集密書架の見学（さすがに狭い…）

▲開架書架の見学

今年は春から縁起がええわい！

松山支部　北地区　山内　知照

正月気分も冷めやらぬ1月19日(金)18:15から駅前ＫＩＴ(キスケボウル)において、松山支部恒例のボーリング大会が行われました。

北地区からは水口喜久美さん、入船安紀さんと３人で参加しました。３人共久しぶりのボーリングで、受付で会うなり「最近膝が痛い・肩が上がらん・指は大丈夫やろか」などなど……。既定の2ゲームを最後まで投げられるかと弱気の言葉の連続でした(笑)

そのようなことを知ってかどうかはわかりませんが、今回の幹事(西地区長)安藤さんから「皆さん怪我の無いように……」と開始前の挨拶がありました。早々にシューズとボールを準備しボックス席へ移動すると、前の掲示板には練習タイムの表示が……

ここで体力を消耗するのはどうかと思い、投球練習はほどほどに切り上げ、フリードリンクの飲み物をいただきながら開始時間を待ちました。

いざ開始となり、隣のレーンではバーン！とピンを勢いよく倒しているのを横目で見ながら、こちらは直前で見たボーリングの投げ方（レーン上のスパットを見ながらの投球など）を実践して、ボールがなんとか中央にいくように意識して投げていました。

予習が効いたのか、１ゲーム目ではストライクが3回連続「ターキー」も記録し、ゲーム終了時は168点の好記録でした。2ゲーム目はどうせ疲れがでて2桁の点数かなと思っていましたが、しぶとく踏ん張り2ゲーム合計で大台の305点で終了しました。終了後、他のレーンの成績を前のボードで見ていると、なんか上位になりそうな予感が……。

予感は的中し、まさかの優勝でびっくり!! このあとの懇親会には都合で参加できませんでしたが、会場内での表彰で、トロフィーと豪華景品（保温ボトル）をいただき、妻が大喜びしていました！

帰り際に副支部長の松平さんからは「ボーリング世代ですね」と声を掛けてもらい(たしか1975年頃第1次ボーリングブーム?)、たしかに!と納得(笑)。後日、地区別の成績でも優勝だったと知らされ、二度びっくりさせられました。成績はともかく皆でわいわいと楽しい一時でした。

お世話してもらった西地区・支部役員の方達に感謝です。ありがとうございました。

無料・住宅耐震相談会

西予支部　支部長　井関　克徳

日　　時：令和5年11月5日(日)9:00～15:00
参　加　者：会員４名(相談員：３名・補助員：１名)
相談対象者：一般来場者

１．活動内容

西予市の野村乙亥会館前にて、「無料・住宅耐震相談会」を行いました。水害後の復興もほぼ終わり、心配されている「南海地震」への　対策時期でもあります。

支部長・副支部長共に耐震診断をしており、主・相談員として対応しました。

▲出店状況

▲軽トラ市会場

活動（相談）状況

朝一に、家の状況写真を持参した相談者が訪れ、さっそく支部長が対応しました。

その後、主に補助金制度の相談がありました。残念なことに、耐震補強の今年度補助金枠は無くなっており、次年度枠の申請の説明が主になりました。

「今、すぐに!」と言うほどではないが、「どうすれば、良いか?」といった具体的な相談があったように、感じました。

２．総括

今回の相談会場は、２か月毎に開催されている「軽トラ市」に便乗させてもらいました。

会場の雰囲気もよく、楽しく開催できました。

▲相談風景

建築と私

松山支部　清水　翔太

松山支部の大内雄志さんよりバトンを受け取りました、松山支部の清水翔太です。大内さんとは建築士の日の発表で一緒に作業させていただき、私にとって貴重な体験になりました。各県建築士が未来を担う子供たちや、地域の人に対して建築を通じ活動している姿に大変刺激を受けたのを覚えています。

私は現在（株）愛媛建築住宅センターで確認申請・適合証明申請の審査を担当させていただいております。“けんちくの輪”はテーマが自由ということなので、あまり文章を書くのは得意ではありませんが、建築と私の関わりについて今までのことを振り返りたいと思います。

私が建築に関わる仕事をしたいと思ったきっかけですが、正直はっきり覚えていません。小学生の頃に通学路にあった空き地で工事が始まり気付いたら建物が完成して、そこで生活をしている人を見てなんとなくすごい仕事だなと思ったのを少し覚えています。

私は松山市出身で、高校は愛媛県立松山工業高等学校の建築科に進学しました。建物の部材名称を覚えたり製図の模写をしたりしていましたが、その中でも毎年行われている愛媛県内高校生建築競技設計に描いた作品を３年間提出したことが印象に残っています。

建築を学ぶにつれて資格を取得したいと思い、高校卒業後は在学中に二級建築士の資格が取得出来る県外の専門学校に進学しました。実家を離れての暮らしは戸惑いがありましたが、運良く友人とルームシェアだったため不安はすぐになくなりました。ただ毎日の炊事・洗濯・掃除・ゴミ出しなど慣れていないことも多く大変だと感じました（改めて親への感謝の気持ちが大きくなりました）。

講義では建築史などを学ぶうちに、建築は単なる構造物ではなく人々の生活や文化、地域、気候などに深く関わるものだと知りました。３年目には目標としていた資格取得に挑戦し、なんとか木造建築士と二級建築士を取得することができました。学生生活では石川県にある金沢２１世紀美術館や香川県にある地中美術館へ訪れたことも印象に残っています。

専門学校卒業後は現場監督の仕事に就きました。何もなかった土地に建物が完成するまで携わることが出来て、貴重な経験になりました。建物完成まで約２年かかり、多くの人が関わることを改めて感じました。現場監督の仕事はやりがいを感じていましたが、ただ現場での管理、事務作業に時間が多くかかり、スキルアップのための時間やプライベートの時間の確保が難しいことから転職を考えるようになりました。

そして現在に至ります。当社に入社後は４号建築物の確認審査を主に担当し、実務経験２年を経て2022年度に建築基準適合判定資格に挑戦し、なんとか合格することが出来ました。今は住宅性能表示制度に定められる耐震等級や断熱等性能等級の審査を行っています。

2025年４月以降（予定）からは建築基準法の改正により４号建築物が廃止され、「新２号建築物」・「新３号建築物」と区分されます。また構造関係規定（木造の壁量基準等の改正等）、建築物省エネ法（省エネ基準への適合義務の対象拡大等）の改正があります。建築主、設計士、施工者、審査機関への負担が増えることが予想されますが、一助となれるように頑張りたいと思います。まとまりのない内容ですが最後まで読んでいただきありがとうございます。今回「けんちくの輪」のバトンを渡していただいた大内さん、ありがとうございました。次は松山支部の島本さんにバトンを受け取ってもらいます。島本さんよろしくお願い致します。

▲不定期で休日に写真撮ったりしています（建物に限らず）

▲釣ったアオリイカ。海釣りが趣味です。

日々の生活とともに生きる建築

八幡浜支部　小西　健介

八幡浜支部事務局長の安藤嘉晃さん（八幡浜市役所勤務）より、けんちくの輪のバトンを受け取りました、八幡浜支部の小西と申します。

安藤さんからのバトンという事で、安藤さんと同様に、八幡浜市役所の職員として活躍し、後に設計事務所を開設され、日本を代表する斬新なデザインで木造モダニズム建築の設計士として有名な松村正恒さんについて書かせていただきます。

松村正恒さんはご周知の通り、1913年大洲市の生まれで、35年に武蔵高等工科学校（後の武蔵工業大学・現在は東京都市大学）を卒業後、設計事務所勤務を経て、終戦後の1947年から60年まで八幡浜市役所に勤務され、江戸岡小学校（1953年竣工）や日土小学校（1958年竣工・現在も活用中）などの学校建築や、市立病院、図書館、公民館施設など多くの公共建築を設計しており、特に教育施設では、子どもたちに豊かな教育環境を提供した両面採光の確立やハイブリッドな木構造などの優れた設計により、1960年には文藝春秋にて、丹下健三氏などと並び建築家10傑にも選ばれた優れた建築家であります。松村氏の代表作として知られる日土小学校は、木造のモダニズムの優れた作品として高い価値が評価され、2012年に戦後の木造建築としては初めて国の重要文化財に指定されました。

私が日土小学校を初めて知ったのは、随分後のことで、小学校の頃にスポーツ少年団の練習試合に訪れた際です。

試合の合間に遊んでいると川に面した場所にテラスがあり「この学校こんな遊び場あるやん」というくらいの印象でしたが、小学生の子供に印象付けられる建物は今思うとすごい事だなと思います。

▲川に面したテラス

松村氏は、子どもたちを最優先に考え、子どもたち目線の魅力的な校舎を設計し、画一的な学校の設計は、度が過ぎてしまえば、子どもたちにとって窮屈な場所になると考えていたようです。

日土小学校は、自然溢れる山やみかん畑、川に囲まれており、両面からの採光と通風を確保した教室、ゆったりとした廊下、小学校１年生の身長に合わせた階段や、川に面したテラスなど、小学生が伸び伸びと、想像力豊かに学習できる環境と、緑溢れる自然と、斬新なデザインが共存した、日本を代表する木造モダニズム建築です。大人になった今でも、仕事で学校を訪れた際には、童心に戻りワクワクします。

私が20歳くらいの頃に、地元の幼馴染が、偶然にも東京の大学に進学しており、友人を頼りに東京に遊びに行った際に、ついでに友人の学校を訪れたのが、東京世田谷区の尾山台駅にある武蔵工業大学でした。

友人は建築科を専攻しており、「元八幡浜市役所の職員さんで武蔵工業大学卒業生の松村正恒さんって有名な建築家がいるらしいよ」と教えられたのが松村氏を知るきっかけでした。

当時の武蔵工業大学も、緑溢れるキャンパスや近くを流れる多摩川や公園など、都内なのに自然に囲まれた環境で、今にして振り返ると、少なからず後の松村氏のデザインに影響を与えたのかなと思いました。

その後、私も父から跡を継ぎ、建築業に携わり25年ほどになりますが、縁があって、弊社が松村氏の代表作である日土小学校西校舎新築主体工事（2010年竣工）に関われたことは、大変貴重な経験となりました。

▲日土小学校西校舎の教室

八幡浜市は新鮮なみかんや魚介、ちゃんぽんのまちとしてＰＲをしておりますが、松村氏のモダニズム建築が多数現存するまちとしてもＰＲすることを祈念します。

最後までお付き合いありがとうございました。

令和6年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について
〔建築士会は、まちづくり活動を支援します。〕

公益社団法人愛媛県建築士会は、会員の皆さんが地域の人々と共に行う社会貢献事業や建築士会の内部組織（研究会等）が実施する地域貢献活動としての事業を応援します。
すでに活動をしている方も、これから何か始めようという方も、一定の条件を満たせば事業に助成金を活用することができます。

1．助成の対象事業の内容

会員が参画する以下のテーマに沿った営利を目的としない地域貢献活動が対象です。

（1）地域のまちづくり　（2）景観の保全
（3）居住環境の保全・整備
（4）自然環境の保全・整備　（5）福祉環境の整備
（6）地域住宅づくり　（7）地域防災づくり
（8）歴史的遺産の再生と活用
（9）その他、地域活性化、社会サービス

2．助成の対象

・建築士会会員が参画する地域貢献活動に対する活動助成
・国、地方公共団体から、建築士会に対しての委託事業、人材派遣に関連して進められる地域貢献活動に対する活動助成
・地域貢献団体助成事業運営委員会が助成を必要と認めた地域貢献活動に対する活動助成

3．助成金

・１件当たり限度額50万円とし、助成率は事業活動費の3分の2とします。
（継続的事業の場合は3年を限度とします）

4．応募手続き

①助成申請者は
・申請時に組織内に建築士会会員として継続して在籍が3年以上の者が複数参画している活動団体の代表者。
・建築士会の内部組織（研究会等）の代表者で上記2の助成事業を行おうとする者。
②助成申請書は規定の申請書により申請してください
（申請書はHPからダウンロードできます）
http://www.ehime-shikai.com/other/6734.html

5．応募期間

令和6年4月1日～5月31日まで（事前問い合わせは随時受け付けます。）
※応募期間前であっても、仮受付をしますので、お申し出ください。

6．助成対象事業の決定と助成金交付等について

・助成対象事業の趣旨に沿った事業かどうかを基準に「愛媛県建築士会地域貢献団体助成事業運営委員会」が審査します。助成額の決定は、申請書受理後60日以内に書面にて通知します。
・事業の実施期間は、助成額決定日から令和7年3月31日の間に実施される活動を基本とします。
・助成金は、交付申請者に対して、助成金交付決定通知後の助成金請求に基づき交付します。
・交付申請者には、活動の内容・助成金の管理・報告書の提出に責任を持っていただきます。

7．助成事業一覧について（事例）

年　度	事　業　名		助成額	備　考
平成29年	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	10万円	1年目
平成30年	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	2年目
	松山市	女性と防災の会	5万円	1年目
令和1年	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	3年目
	松山市	女性と防災の会	8万円	2年目

提出及び問合せ先：公益社団法人愛媛県建築士会
〒790-0002 松山市二番町4-1-5 建築士会館2階
TEL：089-945-6100　FAX：089-948-0061　E-mail：lee04603@nifty.ne.jp

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。
（尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。）

「いしづち」の次号の原稿締切日
令和6年　5月号（158号）　令和6年3月28日（木）

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。
※1ページ写真込みで2150文字（25文字×43行×横2段）のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。
写真は1ページ当たり3枚程度まで題名を付けて添付してください。
また宜しければ投稿者の写真（免許写真程度の顔写真）を添付してください。
会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。
（尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。）
この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にまで、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。

情報・広報委員会

読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしています。
「いしづち」編集委員会（士会事務局内）宛　FAX 089−948−0061

編集後記

建仁寺は京都最古の禅寺であり、臨済宗建仁寺派の大本山。私は2024年が辰年（龍）ということで、龍図で有名なこの寺に訪れました。海外の方が大半の観光客で賑わう祇園の花見小路の隣にあるとは思えない静寂な空間。そして、風神雷神図（国宝）や雲龍図、双龍図など多数の貴重な絵画や美しい禅庭を鑑賞することができる、美術館のようなお寺です。

宋で禅を学んだ栄西が、建仁2年（1202）、中国の百丈山を模して建立したとされており、勅使門を正面に、三門、法堂、方丈が一直線に並び、禅修行のひとつである浴室も現存していました。

方丈は慶長4年（1599）、安芸の安国寺から移築した優美なこけら葺きの建物で、その目の前には大雄苑という枯山水の庭が美しい。その建物にある「雲龍図襖」は、当時方丈に招かれた客人が最初に通される部屋「礼の間」に飾られており、眼力が鋭く雲間から現れる龍が力強く描かれています。

法堂（はっとう）は拈華堂（ねんげどう）とも呼ばれ、仏殿を兼ねた禅宗様の仏殿建築で、明和2年（1765年）に建設されています。この建物の大空間の天井には日本画家の小泉淳作による「双龍図」が描かれています。この天井画は2頭の「阿吽」の龍が絡み合うように描かれ、大きさは畳108枚にもなり圧巻の迫力と今にも飛び出してくるような躍動感がありました。

龍は「水を司る神」ともいわれ、僧に仏法の雨を降らせると共に、建物を火災から守るという意味がこめられているといいます。これらの龍に世界がこれ以上の災害に見舞われないように！と世界平和を祈りました。

この建仁寺は「建物の内部や美術品の写真撮影OK」です。色々な所に行きましたが、建物の内部が正式に写真撮影OKな寺社仏閣はここが初めてでした。 置かれている美術品が複製だからとのことですが、私は写真撮影が大好きなので嬉しくなりました。

皆さんも世界平和を祈って頂きながら是非写真を撮って頂きたいです。

〈いしづち〉2024/3
令和6年3月発行
発行人　**会長　尾藤淳一**
発行所　**公益社団法人　愛媛県建築士会**
〒790-0002　松山市二番町四丁目1-5　愛媛県建築士会館2F
TEL（089）945-6100　FAX（089）948-0061
http://www.ehime-shikai.com
印刷所　アマノ印刷有限会社
情報・広報委員会・広報委員
委 員 長／大平　将司　　副委員長／渡邉　道彦
編集委員／河合　優志　　西岡　亜有美　　西森　勉　　花岡　晶子